

幼児の学びの充実を図る預かり保育とは —異年齢交流に注目して—

椛島 香代*・安達 祐亮**・小出 美緒**

幼稚園における「教育課程に係る教育時間終了後の教育活動」（預かり保育）における幼児の学びについて、異年齢交流に注目して観察記録の分析・考察を行った。年長児は年少児の世話をしたり、優位に立つ経験を通して自分ができることを確認し、自信を育んだり、相手のペースに寄り添う経験をしたりしている。年少児は、年長から知識や技能を伝えられたり、安心できる存在として頼ったり、思いがけない事態に困惑したりするなどの経験をしている。教育課程に係る教育活動は同年齢の幼児でかかわることが多いため、預かり保育は異年齢交流の貴重な場となっている。このことから、年長児から年少児へ遊びの伝承の機会ともなりうることが示唆された。現在の幼児の生活実態から考慮しても、預かり保育における異年齢のかかわりは幼児にとって貴重な経験の場となると考えられる。保育者は、預かり保育を異年齢交流の場として意識し、特に葛藤場面などにおいては幼児が多様性を受けとめ認識できるように援助していく必要がある。

Key Words：幼児教育，学びの質，預かり保育，異年齢交流

I はじめに

幼稚園教育における「預かり保育」は保護者のニーズに応える子育て支援の領域から始まった(恒川, 2012)。預かり保育は「教育課程に係る教育時間終了後の教育活動」として幼稚園教育要領に取り上げられている。この表現は、幼稚園教育には教育課程に係る時間と、それ以外の時間が存在することを示している。「教育課程に係る時間」は全園児が対象であるが、「教育課程に係る教育時間終了後」（以下、預かり保育）には園児全員が残るわけではないということで、その時間をどのようにとらえるか、「終了後の時間」の取り扱いについてさまざまな考え方や方法が存在してい

ると考えられる。言い換えれば、幼稚園の「自由裁量」に任された時間といえるだろう。

まず、預かり保育の実態について、文部科学省「平成26年度幼児教育実態調査」をもとに考えてみよう。図1は預かり保育の実施率である。平成9年度では公立幼稚園で5.5%、私立幼稚園で29.2%、合計46.0%であったのが、平成26年度には公立幼稚園60.9%、私立幼稚園82.5%、合計95.0%となっている。私立幼稚園ではほとんどの幼稚園で預かり保育が実施されていることがわかる。

実施日数(図2)については、平成26年度には平日(月～金曜日)に5日実施している園が公立幼稚園67.2%、私立幼稚園93.6%、合計86.5%である。また、預かり保育の終了時間(図3)

* 人間学部児童発達学科

** 文京学院大学ふじみ野幼稚園

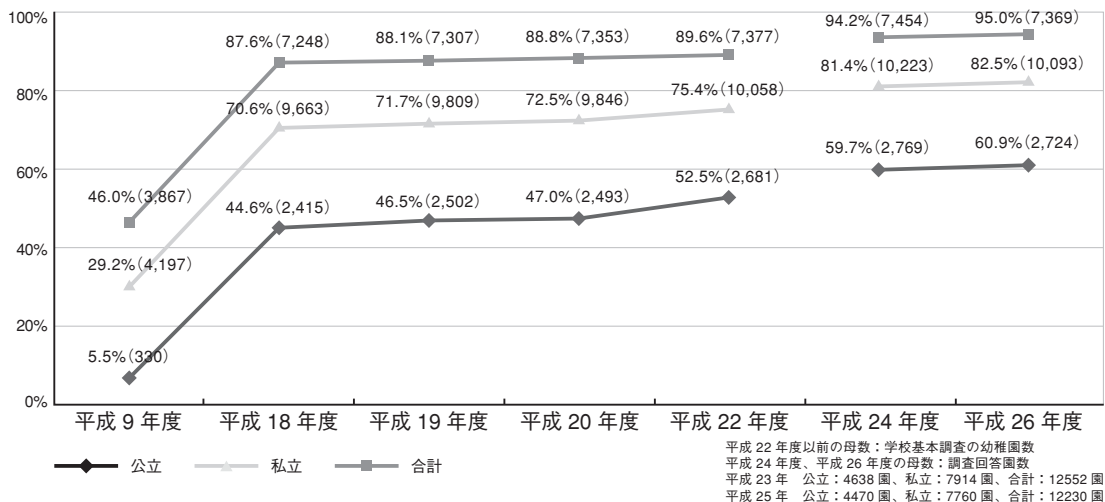


図 1. 預かり保育の実施率（文部科学省「平成 26 年度幼児教育実態調査」より）

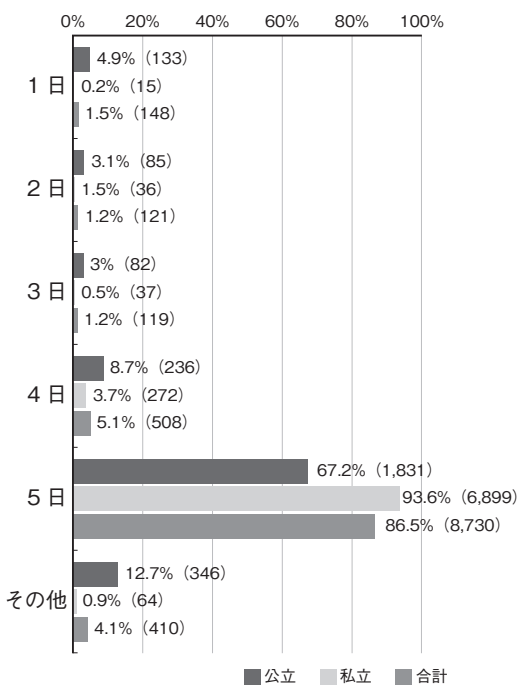
は、公立で一番多いのは午後 3 時～ 4 時 32.4%，二番目は午後 5 時～ 6 時が 26.8%，私立幼稚園は午後 5 時～ 6 時が 47.2%，午後 6 時～ 7 時が 33.2% の順である。私立幼稚園は長時間の預かり

が多くなっている。合計では午後 5 時から 6 時が 41.7%，午後 6 時から 7 時が 27.2% である。保育所では、午前 9 時～午後 5 時の 8 時間を原則として延長保育で午後 6 時～7 時までの開所があるが、幼稚園の保育時間も保育所と変わらない園が多いと解釈できる。幼稚園において、長時間保育が常態化している実態があるといえよう。

平日の受け入れ人数（表 1）は、合計すると 1 園あたり 1 日 18.5 人であるが、各園の利用率については調査がないのでそれぞれの園でどのくらいの幼児が利用しているかについては不明である。在籍数、地域性などによっても利用人数には違いがあるであろうことから、利用人数は幼稚園によってばらつきもあることが推測される。

長期休業期間中預かり保育実施率（図 4）は、公立幼稚園 56.2%，私立幼稚園 86.7%，合計 78.5% であり、実施時間数（図 5）は 8 時間を超えて実施が公立、私立共に一番多くそれぞれ 58.5%，71.8%，合計 69.2% となっている。夏休み、冬休み、春休み中も登園する幼児が一定数存在する。さらには 8 時間を超えるなど、日中のほぼ一日を幼稚園で過ごす幼児もいるということになる。

以上のように、幼稚園の預かり保育は、年間を通して実施されており、実施時間も長時間になっていることがわかる。このことを子どもの側から考えてみるとどうだろう。「教育課程に係る教育時間」と預かり保育は連続しており、「幼稚園で



母数：預かり保育実施園数（公立：2724 園、私立：7369 園、合計：10093 園）
 () 内は実施園数

図 2. 平日（月～金）週当たりの平均実施日数（文部科学省「平成 26 年度幼児教育実態調査」より）

表 1. 平日の預かり保育の受け入れ幼児数（文部科学省「平成 26 年度幼児教育実態調査」より）

(平成 26 年 6 月 23 日（月）～ 27 日（金）の 5 日間）

| | 公立 | 私立 | 合計 |
|--------------|------------|------------|------------|
| 受入幼児数（5 日間） | 144, 298 人 | 788, 500 人 | 932, 848 人 |
| 受入幼児数（1 日間）※ | 28, 860 人 | 157, 710 人 | 186, 570 人 |
| 1 園あたり（1 日間） | 10.6 人 / 園 | 21.4 人 / 園 | 18.5 人 / 園 |

※実施園：公立：2, 724 園，私立：7, 369 園，合計：10, 093 園

※「受入幼児数（1 日間）」については、「受入幼児数（5 日間）」を 5 で割った値

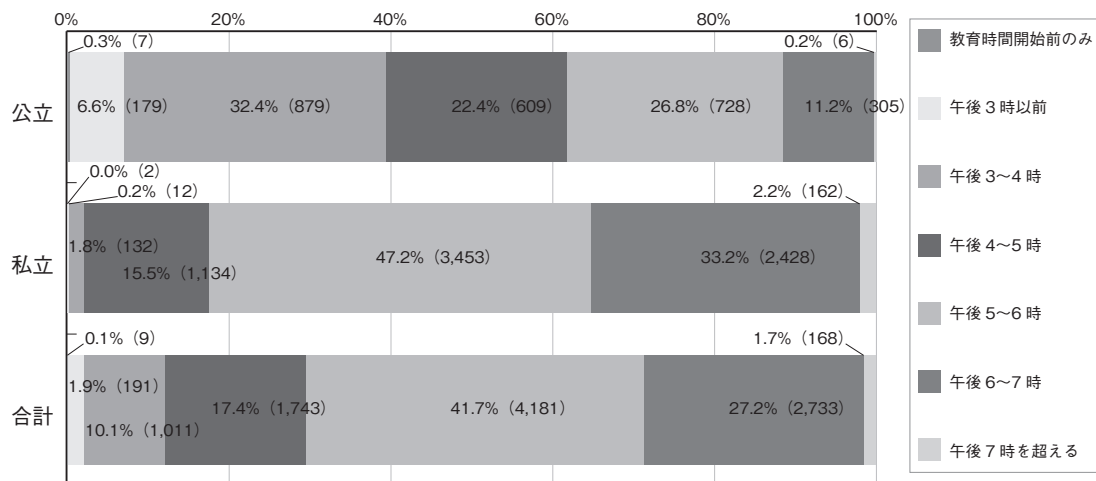
母数：長期休業期間中以外に預かり保育を実施している園の総数
()内は実施園数

図 3. 預かり保育の終了時間（文部科学省「平成 26 年度幼児教育実態調査」より）

過ごす」ことに変わりはない。つまり、預かり保育の時間が子どもにとってどのような時間であるべきであるかを考える必要があるのではないかと。文部科学省（2009）も「預かり保育は教育活動である」と改めて強調しているように、「教育課程に係る教育時間」との関連の中で、教育時間終了後も残って預かり保育に参加する幼児のためにどのような経験や学びを提供できるのかという視点で保育内容の検討を行うことが必要であろう。また、長期休業期間中は、「教育課程に係る教育時間」はなく、一日が「預かり保育」の時間帯ということになる。長期休業期間中には、本来は幼児が家庭で過ごし、長期休業中ならではの幼稚園教育期間とは異なる経験をしてもらうことも大切だが、保護者の就労等の理由から長期休業中もほぼ毎日利用する「ヘビーユーザー」も存在するだろう。

幼児の安定、安全を図ること以外にどのような経験を提供できるのかについても吟味すべきではないか。本稿では長期休業中（夏休み）に預かり保育に参加した幼児の姿を捉えながら、預かり保育における幼児の経験や学びを考察していきたい。

II 預かり保育における幼児の経験

預かり保育において幼児がどのような経験をしているのかについて取り上げた先行研究は少ない。ここでは、預かり保育で幼児が経験していることを整理するため、文部科学省「幼稚園における子育て支援活動及び預かり保育の事例集」（2009）をもとに考察していく。この事例集の中では、5 園の預かり保育の事例を紹介している。各園の事例は、1. 預かり保育に対する園の考え方、2. 預

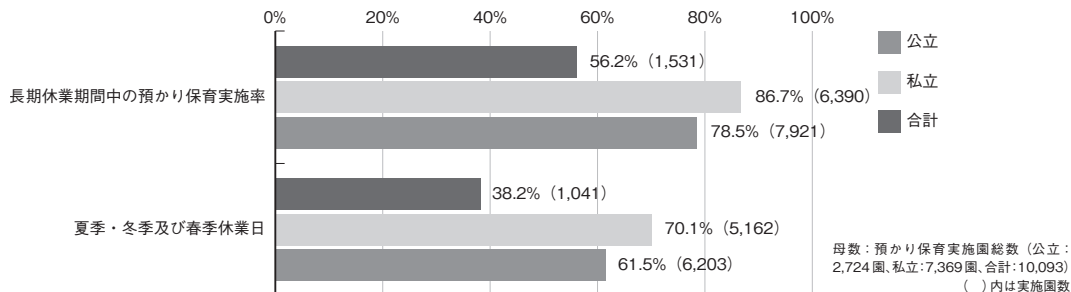


図 4. 長期休業期間中の実施状況（文部科学省「平成 26 年度幼児教育実態調査」より）

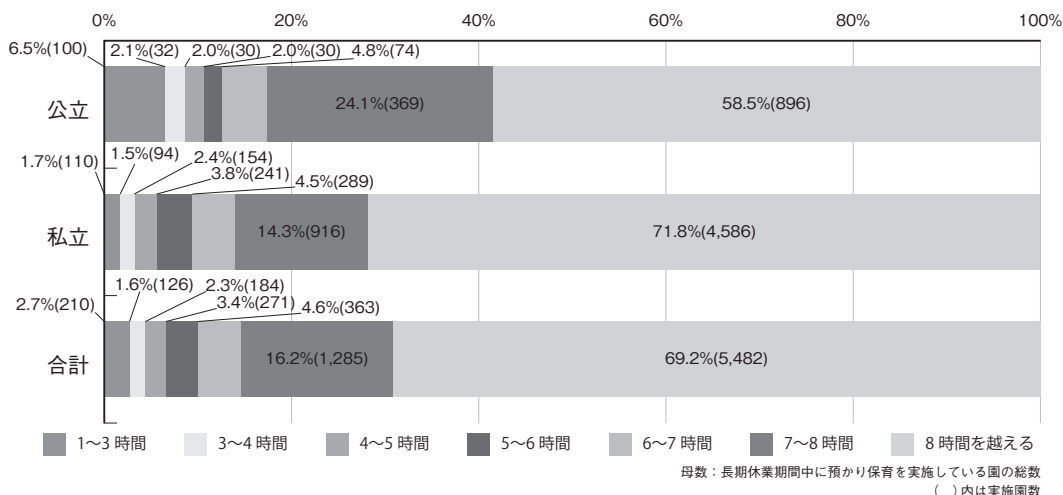


図 5. 長期休業期間中の実施時間数（文部科学省「平成 26 年度幼児教育実態調査」より）

かり保育の実施日・時間, 3. 指導体制, 4. 預かり保育の概要及び計画, 5. 活動にあたっての配慮事項, 6. 成果, 7. 課題, の 7 項目で構成されている。それらの記述の中から預かり保育の中で幼児にどのような経験を提供しようとしているのか, また実際に幼児が経験したことはどのようなことであったかを読み取っていく。

1. 預かり保育で提供したい経験

預かり保育における幼児の経験についての考え方を抽出すると, 以下のように整理できる。各園の事例の記載すべてを対象にした。その結果, 特に記載がない園もあった。

表 2. 預かり保育で提供したい経験

| |
|--|
| <p><群馬県高崎市私立幼稚園> 長期休業中の預かり保育は, <u>異なる年齢の友だちと過ごす体験を多くしてほしい</u>と考えている。できるだけ様々な体験ができるように, 園外に出ていく機会を設けている。 幼児がしたいと思った遊びを大切にし, 楽しく遊べるように工夫する。 通常の保育ではできない少人数での経験をする機会を設ける。</p> |
| <p><千葉県浦安市公立幼稚園> 異年齢の様々な友だちとじっくり遊ぶことのできる場と時間と人的配置を保障し, 幼児の豊かでたくましい成長を支援したい。</p> |

| |
|---|
| <東京都品川区私立幼稚園> <u>「縦割りの保育」が主流となり</u> 、その特性を活かした保育が求められる。 放課後の開放的な時間帯ならではのもの、時間をかけてじっくりと遊びに取り組むことができるもの。 |
| <和歌山県橋本市公立幼稚園> 家庭的な雰囲気 <u>で異年齢児と一緒に遊ぶ楽しさを味わうことを重点目標としている。</u> 園庭の環境を生かし、四季の自然の中で直接体験をしたり、異年齢とかわる機会を増やしたり、伝承遊びなどをとりいれたりして、豊かな体験が得られるようにしている。 |
| <山口県山口市私立幼稚園> 記載なし |

*下線は筆者による

各園に共通するのは「異年齢」（下線）という言葉である。「教育課程に係る教育時間」では、同学年の幼児で学級が編成されることが多いため、同学年の幼児同士でのかかわりが中心となる。預かり保育では日によって人数、年齢、性別など様々である。幼児が異年齢の友だちと遊ぶ機会を得ることができる。園もそのことに注目し、その経験を重視している。この20年で幼児が幼稚園、保育所以外で友だちと遊ぶ機会が半減していることから（ベネッセ教育総合研究所、2016）預かり保育で友だち同士のかかわりやさらには異年齢の友だちとかわる経験をすることは幼児にとって重要であろう。

また、預かりでは時間の制限をゆるやかにし、十分に活動に取り組んだり、自由度を高めて挑戦したりするような場面も容認しようとしている。幼児の主体性を発揮しやすい場でもあるといえよう。

2. 実際の経験

預かり保育に参加して幼児はどのような経験をしたと捉えているのか。各園の記載から関連箇所を抽出して考えていく。

表 3. 預かり保育で経験したこと

| |
|--------------------------------------|
| <群馬県高崎市私立幼稚園> <u>異年齢との交流ができる。</u> |
|--------------------------------------|

| |
|--|
| <群馬県高崎市私立幼稚園> <u>異年齢との交流ができる。</u> |
| <千葉県浦安市公立幼稚園> <u>異年齢の交流がある。</u> |
| <東京都品川区私立幼稚園> 家庭では体験することが難しくなっている活動を多く取り入れていくことで、幼児が自ら考え、工夫する力を身につけることができる。 核家族化、一人っ子が増えている中、 <u>異年齢の交流により思いやりの気持ちが育つ。</u> |
| <和歌山県橋本市公立幼稚園> 子育て支援からの記載はあるが、子どもの立場からの記載なし |
| <山口県山口市私立幼稚園> 子育て支援からの記載はあるが、子どもの立場からの記載なし |

*下線は筆者による

記述があった園すべてで前述の「提供したい経験」と同様、異年齢の交流をあげている。また、家庭で体験することが難しくなっている活動に取り組むことができることも取り上げている。幼児の生活実態の変化に伴い、家庭で過ごす時間は外遊びや友だちと遊ぶ機会が減ってきている（ベネッセ教育総合研究所、2016）。預かり保育の時間帯に家庭では十分に提供できない経験を補う役割もあると考えられる。

以上のことから、預かり保育における幼児の経験を考えるとき、異年齢の交流が一つの軸になることがわかる。実際にはどのような交流があるのかを捉える必要がある。年長児が年少児の面倒を見る、年少児が年長児をモデルにしてさまざまなことを学ぶなどの経験ができることが推測できる。一方で、人間関係は、必ずしも楽しい経験ばかりではない。特に異年齢交流では、自分がやりたいことを小さい子に邪魔されたり、自分が持っているものを大きい子にとられてしまったり、幼児期は年齢による発達差も大きいので幼児にとってつらい経験になることもあるだろう。しかし、それらの経験は貴重な体験の一つとも捉えることができ、同年齢集団の中では得られない経験かもしれない。異年齢交流を幼児の成長にとって望ましい経験にするためにはまずどのような交流が

行われているか、実態をつかむ必要がある。

えていることがわかる。

Ⅲ A園における預かり保育

預かり保育における異年齢交流はどのようなものか。実際に幼稚園の預かり保育に参加している幼児を観察して分析する。

1. 調査方法

調査期間：平成28年度 夏季預かり保育期間
平成28年7月25日～8月10日の土日祝日以外
計13日間

調査対象園：埼玉県ふじみ野市 私立A幼稚園
(平成28年度在籍数295名)

調査対象者：預かり保育に参加している幼児
対象園は教員の研修・研究のために記録を取ることなど保護者へ説明し承諾を得ている。分析にあたっては個人が特定できないよう配慮する。

調査方法：自然観察法による観察記録および預かり保育担当者による保育記録から、異年齢交流場面を抽出し事例検討を行う。

2.A園の夏季預かり保育の概要

1) ねらい

A園では、平成27年度から一学期終了後の長期休業期間中も預かり保育（以下、夏季預かり保育）を始め、平成28年度は2年目である。夏季預かり保育のねらいは、以下の3点である。

- ・新しい環境になじみ安心感を持ってゆっくりと過ごす
- ・遊びを通して周りの友だちとかかわりを持つ
- ・異年齢の友だちとかかわりを通して遊びに広がりを持つ

A園でも異年齢交流がねらいとしてあげられており、幼児に異年齢交流の経験を提供しようと考

2) 運営

＜A園の夏季預かり保育運営＞

表4は、夏季預かり保育の要項である。1学期終了後から8月中旬にかけて計13日間行われており、土日祝日は実施していない。利用パターンは一日利用、午前利用、午後利用の3つから選択することができ、幼児によって登園時間、降園時間が異なっている。申し込みは2週間前までに締め切り、夏季保育実施日の人数確認や利用児名簿を作成している。事前に利用児を把握することで、幼児の実態や個別の援助について書面にて職員間で共有している。

＜一日の流れ＞

夏季預かり保育の一日は概ね、表5に示すような流れになっている。夏季預かり保育の場所は、教育時間終了後の預かり保育で利用している多目的室を使用している。9:00と13:00に集まりを行い、利用児の紹介やその日の活動の流れについて確認している。設定されている教材は、ままごとや製作、ドミノやプラレールなど教育時間終了後の預かり保育と同様の設定である。その他、虫捕りができる教材や水遊びなどの活動も設定され、夏季ならではの遊びが展開できるような環境となっている。教育課程に係る教育活動では、学年ごとに活動している水遊びをしているが、夏季預かり保育時には利用人数によって、異年齢合同で活動することもある。

表4. 夏季預かり保育要項

| | | |
|------------|--------------------------------|-------------|
| 夏季預かり保育実施日 | 平成28年7月25日から8月10日の土日祝日以外の計13日間 | |
| 利用パターン | 一日利用 | 8:30～16:30 |
| | 午前利用 | 8:30～12:30 |
| | 午後利用 | 12:30～16:30 |
| 申し込み方法 | 夏季預かり保育開始2週間前までに電話または窓口で予約を行う | |

| | 8:00 | 8:30 | 12:00 | 13:00 | 16:30 | 17:00 |
|------|------|------|-------|-------|-------|-------|
| 職員 A | | | | | | |
| 職員 B | | | | | | |
| 職員 C | | | | | | |
| 職員 D | | | | | | |

図 6. 職員の動き

表 5. 夏季預かり保育の一日の主な流れ

| 時間 | 活動内容 |
|-------|---------------------|
| 8:30 | 一日利用児・午前利用児 登園 |
| 9:00 | 集まり・好きな遊び |
| 10:30 | 水遊び（天候により行わないこともある） |
| 12:00 | 片付け・一日利用児 昼食 |
| 12:30 | 午前利用児 降園・午後利用児 登園 |
| 13:00 | 集まり・好きな遊び |
| 16:00 | 片付け |
| 16:30 | 一日利用児・午後利用児 降園 |

＜期間中の利用人数と利用回数＞

期間中の利用人数は、全園児 295 名中 67 名 (22.7%) の利用があり、そのうち利用回数の最も多い幼児は 13 回、最も少ない幼児は 1 回である。一日の平均利用人数は 17.9 人、利用人数が最も多かった日は 28 人、最も少ない日は 10 人である。一日の利用人数の上限を 30 人に設定していたが、調査した年度の夏季預かり保育では、定員を超えることはなかった。A 園の預かり保育は、約 8 割の幼児が一度も利用していないことになる。このことから、A 園では、夏季休業中は、家庭で過ごすことを基本とする家庭が多いと考えられる。

＜職員体制＞

職員体制を図 6 に示す。夏季預かり保育は、担任教諭、学年フリー教諭、預かり保育専任教諭が持ち回りで担当している。一日の保育は 4 名の職員が担当しており、常時 2 名は保育に携わるような体制が組まれている。12:00～13:00 は昼食と午前利用児の降園、午後利用児の登園時間が重なるため、職員を多く配置している。その他、活動内容や人数により、職員 D が 12:00～13:00 以外の時間で保育に入ることもある。

IV A 園における夏季預かり保育時の異年齢交流

1. 分析方法

幼児の行動観察記録及び預かり保育担当者の保育記録のうちから異年齢交流場面を抽出してエピソードにおこし分析を行う。採取された事例は、すべてが年長児と年中児・年少児のかかわりであり、年中児と年少児の事例はみられなかった。よって、本稿では年長児と年中児・年少児とのかかわりを考察していく。

2. 事例と考察

事例 1

平成 28 年 8 月 4 日 (木) 午前
個々でゆったりと遊びができるよう室内に製作ができる場を設定している。そこで年長児 1 名と年少児 1 名のかかわりが見られた。年長児が普段の遊びの中で親しんでいる平仮名のスタンプ (以下、スタンプ) を使って遊んでいた。年少児は他の製作をしていたが、そのスタンプを初めて目にしたためか興味を抱き、年長児の行為を真似ようとした。しかし、スタンプにインクがうまくつかず紙にしっかりと押すことができなかった。①隣にいた年長児はその姿を見て代わりに押しあげた。スタンプ専用の紙には枠線が引いてあり、ひらがなを一文字ずつおせるようになっている。年少児がその枠からはみ出して押そうとしていると、②年長児が押す場所を示す姿が見られた。③年少児は年長児に教えられたことでやり方がわかり、紙にスタンプすることを続けた。

年長児は、隣にいる年少児の姿をみて、年少児がやりたいことや困っていること汲み取り、実現させるための手助けを行っている (下線①)。また、押す場所を示す姿 (下線②) から、自分が知っていることを伝え、遊び方を伝えている。年少児は、普段は年長組に設定されているため教育課程

に係る教育活動時間にはかかわることのなかった平仮名スタンプという教材に出会い、新しい遊びを知ったり、新しい遊び方に触れたりしている。また、スタンプの押し方、押す場所など年長児から技能や知識を教わっている。教わってできた、という経験が遊びの継続につながっている（下線③）。

事例2

平成28年8月4日（木）午前

季節に合わせた遊びが楽しめるように屋外の広場にビニールプールを設置した。ビニールプールに入ることのできる人数の都合で、年少児・年中児・年長児は時差をつけて学年ごとに入る予定にしている。

年少児のA男は年長児と水遊びがしたくて、自分の学年の時間に水遊びをすることを嫌がった。実際の活動参加人数に余裕があったためA男は年長児と一緒に水遊びに参加することにした。④年長児は、水着に着替える際に着替える場所に年少児を連れて行ったり、物の始末を一緒に行ったりしていた。⑤年少児は、年長児に手助けをしてもらい満足した表情を見せた。

年長児は年少児に対して、活動を行うために必要な行動一緒に行っている（下線④）。水遊びの準備は、通常の保育においても行っており、年少児も経験している。夏季預かり保育時においても、準備の手順は同じであり、年少児が1人でもできることである。しかし、事例では、年長児が手伝う姿が見られ、相手の困り感によらず、年長児が援助する姿がある。下線部②からは、年少児が自分のできることを年長児と一緒にしてくれることに親しみを感じ、年長児が安心できる相手となっている（下線⑤）。年長児にとっても年少児の世話をすることで自分の成長を実感したり、自信につながったりすることもあるだろう。教育課程に係る教育時間では、水遊びは各学年で展開される活動であるためこのようなかかわりは生まれにくい。異年齢で共に生活する場面を互いに経験できている。

事例3

平成28年8月9日（火）午後

午後になると気温が40度近くになり戸外で遊ぶことが難しい。一方で、午後から登園する幼児もおり、動的な

活動を保障することが必要である。A園は大学と併設しているため、大学校内を使用させてもらうことができる。そこで、「探検」と称して大学内の散歩を行った。保育者が異年齢でかかわれるよう促すと、年長児が自分よりも小さい子の手を引き行動していた。散歩へ出掛ける前に、「先生や友だちと一緒に行動すること」等の約束を確認していたため、⑥年長児は年少児や年中児が手を繋ぎず歩こうとしたり、気になる場へ一人で向かおうしたりとする姿に注意する姿も見られた。⑦年中・少児は、一緒に手を繋ぐことを喜んだり、年長児からの注意に対して素直に応じたりした。

年長児は、集団での過ごし方を示したり活動のルールを示したりしている（下線⑥）。通常の保育においても、年長児は園外活動を経験しており、並んで歩く、保育者の近くに等しい園外での過ごし方が身についている。それらの習慣を年中・年少児へと伝えている。年少児は、園外で年長児と過ごすことに安心感を得たり、過ごし方のルールについて知る機会になったりしている（下線⑦）。年少児は、園外で過ごす経験が少ない。園外に出掛けることの期待感と同時に不安感も感じることもあるだろう。年長児が隣にいることで安心感を持って活動に参加することができる。これらの異年齢間のかかわりは、保育者のかかわりによって生まれている。A園のねらいを保育者は意識して支援を行っているのである。

事例4

平成28年8月8日（水）午後

この日は一日利用する幼児が18名であった。水遊びのない午後の時間帯と一緒に過ごす幼児間がかかわりが持てるよう、保育者が色鬼を提案し、園庭で行った。年長児がこれまでに経験してきたルールとは異なるルールで行うことにした。他学年とペアになり、鬼役の保育者から逃げるようにし、異年齢でかかわる機会を持てるようにした。ペア決めが始まると、保育者の声かけがなくとも、笑顔で他学年の幼児を誘う年長児の姿があった。⑧年中児・年少児の中には、初めて色鬼を経験する幼児もいたが、年長児にリードされて、一緒に逃げる姿があった。⑨年長児は、鬼から逃げるために急ぎながらも、一緒に手をつなぐ年中児・年少児のスピードに合わせる姿もあった。

年長児は、自分たちが習熟している遊びでも参

加しているメンバーによって状況が異なってくることを経験している（下線⑧）。ペアで動くため自分のペースでは動けないこと、年少児とは走るスピードが違うので注意が必要なことなどである。身体の大きさや運動能力の違いを感じ取ることは自分の成長に対する自信になるだろうし、相手のペースに寄り添うことを学ぶ機会にもなる。一方、年少児は遊びのルールが曖昧でも、実際に一緒に動いてもらう年長児がいることで興味を持ったり、新しい遊びを知ったりする機会となっている（下線⑨）。色鬼は伝承遊びの一つであるが、本来伝承遊びは事例のように年長児が遊びを進める中に年少児が参加することで自然とルールや面白さを伝えていくものなのだろう。預かり保育の時間に保育者がこのような場を作り出すことで幼児同士で伝えあう経験を得ることができるのではないだろうか。

事例5

平成28年8月10日（木）午後

この日の午後は年長児1名、年中児17名、年少児1名であり、年中児は好きな遊びを同学年の友だちと行う姿が多かった。年長児B子は、自ら他学年の幼児へかかわることよりも、一人で遊んだり、保育者を自分の遊びに誘ったりしていた。保育者と数名の幼児が園庭でカブトムシ捕りを始めた。B子も他児と一緒に園庭に出たものの、カブトムシ捕りには参加せず、三輪車を漕いでいた。⑩保育者と年中児がカブトムシを見つけ、興奮して大きな声をあげていると、⑪B子はすぐにその場にかけて、「私が捕ってあげるから」と年中児が持っていた虫網を取り、カブトムシを捕まえた。⑫飼育ケースに入れたカブトムシを得意げに「自分が捕った」と他児や保育者に言っていた。

年長児は、自分が活躍できる場を見つけ、年長者としての立場を誇示している（下線⑪）。学級集団以外でのかかわりは、幼児にとって新たな関係性を築ける場となっており、学級や学年の枠組みにとらわれない中で、自己を発揮したり、自分の力を試したり場にもなっている。年中児・年少児は、自分たちの盛り上がっていた遊びが（下線⑩）年長児にリードされ、予想していなかった展開に出会い、憧れの気持ちだけでなく、年長児の振る舞いに困惑する経験もしている（下線⑪⑫）。

年長児は、いばったり主張したりする機会にもなり、年少児はそれを不満に思うこともある。社会では異年齢集団が当たり前であり、立場の違いによる「理不尽さ」は、誰もが経験することである。幼児期から様々な人と交流することは「理不尽さ」にも出会う機会となり、自分の気持ちを立て直したり、相手にどのようにかかわるべきか社会的技能について考えたりする機会となるだろう。保育者が見守る中で、多様な経験をしていくことは挫折や葛藤を乗り越える力を育むことにもなるだろう。

3. 夏季預かり保育時の異年齢交流について

A園の通常の保育では、学年で保育を行うことが中心であり、異年齢で遊ぶことは少ない。しかし、夏季預かり保育では異年齢でかかわる場となっていることがわかった。上記の事例から異年齢でのかかわりにおける年長児、年少児・年中児の経験を表6にまとめる。

表6. 預かり保育における異年齢の経験

| |
|--|
| <p><年長児の経験></p> <ul style="list-style-type: none"> ・相手のしてほしいことや困っていること汲み取り、実現させるための手助けを行う。 ・自分が知っていることを相手に伝え、遊び方を伝える。 ・活動を行うために必要と考えられる行動を一緒にに行い、自分から動いて世話をする。 ・集団での過ごし方や活動のルールを示す。 ・遊びに参加しているメンバーのルールの理解に違いがあっても、ルールや動きを変化させ、遊びを成立させる。 ・自分が活躍できる場を見つけ、年長者としての立場を活用する。 |
| <p><年中児・年少児の経験></p> <ul style="list-style-type: none"> ・新しい遊びを知ったり、新しい技術に触れたりする。 ・異年齢とかかわることに親しみを感じ、年長児に安心感を持つ。 ・園外で年長児と過ごすことに安心感を得たり、過ごし方のルールを知ったりする。 ・遊びのルールの理解が曖昧でも、実際に一緒に動いてもらう年長児がいることで新しい遊びに興味を持ったり、ルールを知ったりする。 ・自分たちの遊びが年長児にリードされ、予想していなかった展開に出会う。 |

年長児は、自分が知っていることや経験したことのあることを相手に言葉や行動によって伝えている。また、自分よりの生活経験の少ない相手に対して直接援助をすることや、相手にとって必要な援助を自分の経験から導き出したりしている（事例2）。幼稚園生活の中では、年長児が、園内で最も生活経験がある者として、様々な場面で他学年のモデルや援助者としての役割を担う場面がある（事例3）。夏季預かり保育でも、同様に年長児が年長者としての振る舞いを学ぶ機会となっている。また、集団遊びへの参加方法に同年齢集団とは違いがみられるように、自分が経験していることを相手の状況に応じて変化させることも経験している（事例4）。年齢が異なることで理解が難しいことを相手に伝わるように工夫したり、「教える」という行為を通して、自分が得たことを確認したり、より深く理解したりする機会となっている。一方で、事例5にみられるように異年齢児とのかかわりの中で、自分が優位に立てる場に気付き、行動を起こす経験もしている。この経験は、生活経験により違いがある異年齢集団において、学級集団よりも経験できる機会が多いだろう。年長者としての振る舞いを学ぶだけでなく、自分が優位な立場に立つ経験は、様々な関係の中で自己を発揮することに繋がるのではないか。

年中児・年少児にとっては、年長児から、新しい遊びや技術を言葉と一緒に取り組むことから教えてもらう経験をしている（事例1、事例4）。また、年長児に対しての安心感も持つ経験をしている（事例3）。年長児の遊ぶ姿や言葉から刺激を受けて、新たな発想や遊び方、道具の使い方を知る機会となっている。また理解が難しい遊びや活動であってもモデルを示す年長児がいることで、新しい活動へ安心して取り組む機会や集団で生活する楽しさを感じることができる（事例4）。自分では取り組めないことに一緒に取り組んでくれることや、自分ではできないことを実現できる年長児の姿を身近に感じることは、年長児への憧れにも繋がるだろう。一方で、事例5に見られるように、年長児の振る舞いに困惑することも経験している。

A園の「教育課程に係る教育時間」においては、異年齢のかかわりが少ないため、預かり保育の場面はその貴重な機会となっている。それぞれの学年が異なる学年の幼児に対しての行動の仕方を経験し、考える場となっている。甘える、助けるだけの存在ではなく、年上の子にとっては年下の子に対して年上であることを誇示する心地よさを感じたり、年下の子にとっては年上の子の存在を身近に感じ、緊迫した雰囲気や憧れを意識したりする機会ともなっている。

V おわりに

幼稚園における預かり保育において、幼児は異年齢交流の機会を持つことができ、その中で年長児、年少児それぞれに多様な経験をもたらすことが示唆された。幼稚園では学級は同じ学年の幼児で編成されることが原則である。それゆえ、「教育課程に係る教育時間」は同学年の幼児と過ごすことが多いだろう。預かり保育は、利用人数にもよるが、概ね利用する幼児が年齢にかかわらず共に過ごす時間になる。異年齢の交流の場になるのである。保育者はこのことを意識し、どのような交流を提供するのか吟味すべきであろう。事例にもあったが、異年齢の集団遊びなどはよい例である。現在、幼稚園、保育所以外の場所で子どもたちが大人数で、かつ異年齢で遊ぶ機会はほとんどないといってよい。預かり保育の機会を活用し、運動能力や理解力の違いによってルールを工夫したり、自分の動きをコントロールしたりする経験、わからない子どもに教える、弱い自分をかばってもらうなどを経験できるよう配慮したい。もう一つは、多様性に触れる機会となることである。異年齢になるとより個人差の幅が広がる。さまざまな捉え方、能力があることにふれ、共に生活する、活動することを学ぶ機会となる。何より、多様性を受け入れる力、寄り添う共感性を育む機会としたい。年長児が年少児の面倒をみることは、自身の成長を実感する、自身の存在価値を実感し自己肯定感を育むことにもつながるだろう。一方で、思い通りにならない、我慢することも出てくる。相手のペースに寄り添ったり、待たったりする

経験を通して様々な人について理解を深める。年少児の側からも同じことが言える。優しくしてもらったり、いばられたり、時と場合によって様々な人に出会うことになる。様々な気持ちを経験し、相手にどうアプローチすれば心地よい関係になるかを試す。保育者は、このような葛藤場面をより大切にして援助の機会としていくべきである。

現在、幼児の保育時間の長時間化は避けられない情勢である。また、社会および家庭環境の変化により、幼児教育機関が家庭教育を補う必要も出てきている。預かり保育の内容を吟味し、幼児が何を学びとれるのか配慮していくことにより、幼児にとっても保育者にとっても充実した時間となるはずである。今後は異年齢間のかかわりによる社会的技能の発達などにも着目していきたい。

引用文献

- ベネッセ教育総合研究所次世代育成研究室 (2016). 第5回幼児の生活アンケート報告書, ベネッセ教育総合研究所.
- 文部科学省 (2009). 幼稚園における子育て支援活動及び預かり保育の事例集, 文部科学省.
- 文部科学省初等中等教育局幼児教育課 (2015). 平成26年度幼児教育実態調査, 文部科学省.
- 恒川直樹 (2012). 子どもにとっての「預かり保育」—「幼児教育/保育」を問い直す契機としての用語考—, 常磐会短期大学研究紀要, 41, 69-88.

参考文献

- 安達祐亮, 小出美緒, 岩野芽衣花, 梶島香代 (2017). 幼児の学びの充実を図る預かり保育とは, 日本保育学会第70回大会.
- 秋田喜代美 (2010). 保育のおもむき, 東京: ひかりのくに.
- 秋田喜代美 (2017). 保育の心意気, 東京: ひかりのくに.
- 秦野悦子 (2015). 幼稚園における子育て支援としての預かり保育—ある自治体での現状と課題—, 白百合女子大学研究紀要, 50, 73-90.
- 岩野芽衣花, 安達祐亮, 小出美緒, 梶島香代 (2015). 活動の連続性を考える『預かり保育』のあり方, 日本保育学会第68回大会.

- 梶島香代, 尾田芽衣花, 安達祐亮, 小出美緒 (2016). 幼稚園における「預かり保育」の実態—事例研究を通して—, 文京学院大学人間学部研究紀要, 17, 13-20.
- 小出美緒, 岩野芽衣花, 安達祐亮, 梶島香代 (2016). 担任教諭と預かり保育担当者の連携のあり方, 日本保育学会第69回大会.
- 文部科学省 (2008). 幼稚園教育要領解説書, 東京: フレーベル館.
- 文部科学省 (2017). 幼稚園教育要領<平成29年3月告示>, 東京: フレーベル館.
- 恒岡宗司 (2013). 預かり保育の在り方についての一考察 (2) —我が国の幼稚園教育史の視点から—, 奈良文化女子短期大学研究紀要, 44, 57-70.

(2017. 9. 27 受稿, 2017. 10. 20 受理)